
0円の命

他楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

0円の命

【Nコード】

N0208Q

【作者名】

他楽

【あらすじ】

自伝のようなものかな。今楽しい気分の方は、読まない方がよいと思う。きっと不愉快にさせてしまうから。

近年、『親殺し』のニュースが増えている。

まだ年が明けたばかりだというのに、すでに今年も数件起きた。こうした事件が起きると多くの人は、

「何故生みの親を殺せるのか、信じられない」

と、思われるのだろう。

確かに、精神が未成熟なまま大人になり、『逆ギレ』などの衝動的な犯行が多いのは事実だ。

だが、全ての事件で、犯人側にだけ非がある訳ではない。

中には長年の虐待による怨恨が限界に達し、感情を暴発させ、凶行に到らしめるケースもある。

私はこうしたニュースを知る度に、言い知れない息苦しさを感じる。

一つは、自分の子供を『殺人』という暴挙に追い込んだ、親という名のゴミに対して。

もう一つは、そうせざるを得なくなるまで自分を救えなかった犯人に対して。

どうしようもない怒りと哀しさを感じる。

今のカテゴリーで言えば、私も『虐待児童』だ。

あの暗渠のような実家を棄てるまでの十五年間、血の繋がった父親から精神的・肉体的暴力を振るわれつつ育った。

殴る蹴るなど当たり前。

皿や鉄製の灰皿を投げつけらる、パジャマ一枚で氷点下の屋外に放り出されるのも日常茶飯事。

沸騰した湯の入ったやかんを投げつけられ、膝から足の付け根に至る太股一帯に負った火傷の跡が今でもある。

包丁で切り付けられ、左肩に六針縫う裂傷を負った事もあった。入院した私を見舞った父方の祖父は、ただ一言、

「すまなかったな」

と言っただけだった。当時五歳だった私から見ても、到底謝っている者の目ではなかつし、実の息子である男を諫めもしなかつた。他の親戚連中は、見舞いにすら来なかつた。

唯一庇ってくれたのは母方の祖父だけだった。私が退院する日に迎えに来て、母と私、そして姉を連れ帰った。それからの数週間は当時の私にとって信じがたい穏やかさだったが、それも長く続かなかつた。

父が謝罪し、私たちを連れ戻したからだ。

大方の予想通り、あの男の言動になんら変化はなかつたが。

残念な事に、母方の祖父はそれから一年と経たずに他界してしまい、私たちは唯一の庇護者を失った。

与えられたのは罵声と暴力、それに伴う激痛と恐怖。

それだけだ。後には何もない。

『死ね』と言われる度に、自分の生を疑った。

『生きてる価値が無い』と言われる度に、そうなのかと受け入れるしかなかった。

そうではないか。

十に満たぬ子供が、絶対者である親の言葉を疑う事も反言する事も出来はしない。それだけの経験も知識も持ち合わせていない。それに、生まれた時から言われ続ければ、そういうものだと納得せざるを得まい。

それに拍車をかけたのは、母の存在だろう。

不思議な事に、あの男が狂気を向けたのは私だけだった。何が気に入らなかったのかは知らない。知りたくもない。が、母と姉に対して、直接的に害意を向けた事はなかった。

だが、あの男が暴力を振るう度、母は盾となった。私を胸に抱いて、泣きながら抗議した。それが癪に障ったのか、母に対してまで暴力を振るうようになった。私は声も上げられず、ただ震えながら母の腕にしがみつくなかった。

本来ならば、母の愛情に感謝すべきだったのかもしれない。

しかし、私にとって、それは傷となった。

私が居なければ、母は殴られずに済んだ。口汚くの罵られる事も、顔に青痣を作る事もなかっただろう。姉も同じだ。私が居なければ、こんな醜い争いを見なくて済んだ筈だ。

いつの頃からか、そう思うようになっていた。

結局私があの家で教えられたのは、自分が生きてはいけない事と、誰かの傍に居てはいけない事。

だから、私は独りで生きる事を目標とした。

『死ねば楽に慣れるかもしれない』と何度思ったか知れない。手を切っては死にきれず、薬を飲んで胃液まで吐いた。お陰で無数の躊躇い傷が残り、市販薬のほぼ全てが飲めない体になった。一度は包丁を腹につきたてようとして出来ず、余りの不甲斐無さに声もなく哭いた。

死にたくなかった。

今死ねば、あの男の言葉が真実だと認めるようなものだった。

自分が無価値であると、生まれてきた事が間違いだったと、自分を見限るようなものだった。

だから、ともすれば包丁を握りそうになる心を必死で支え、様々な本を読み、『生きていてよい』理由を探した。自分の心を、自分で支えるために、徹底的に知識と論理を身に着けた。

どう生きれば否定されないのか。

どういう姿が真つ当な『人間』なのか。

それだけを探し、考えた。

同時に、実家を出るための貯金をした。中学に上がってすぐ新聞配達を始めた。朝夕合わせて、一日に五百件。月の収入は六万近かった。それを三年間続け、約180万を蓄えた。

だが、その頃になれば社会というものがおぼろげにも見え、高校くらい出ていなければ職などないと判ってくる。だから、下げたくもない頭を下げ、学費は自分で稼ぐ事を条件に、高校卒業まで実家に居る事を願い、許された。口癖のように、

「お前を食わせるのに、いくら掛かっていると思う」

と言いつづけた男だけに、交渉が成功したのは僥倖と言って良い。

だが、それも半年と続かなかった。

ある日、夕食の席で些細な事で口論となり、私は必要な物だけを持って実家を出た。以来、あの家には帰っていない。行く当てもなかったが、とりあえず友人の家に泊めてもらうことにした。

親戚を頼むという考えはなかった。人間というものが、基本的に頼りにならないと知っていたし、血の繋がりほどくだらない物はないと今の自分が証明していた。

私が寒風の中で凍えていても、声も掛けない隣人。

人傷沙汰まで起こしていながら、あのゴミを社会に放置し続ける国家機関。

何一つ信じるに値しない。

頼れるのは自分の知恵と、自分の目で見定めた一握りの人間だけ。後はゴミと変わらない。

その後は、まあ、紆余曲折あって今に至る。それなりに苦労もあったが、楽しくもあった。

社会人としてやっていけるのは、半端者の私を受け入れてくれ

た社長と、社員に推挙してくれた店長のお陰だ。どれだけ感謝しても足りないだろう。

だが基本的な部分は、あの頃から変わっていない。人間はどうしようもなくくだらない生き物だと思っているし、その中で努力し続けている人たちが居る事も認めている。

それでも、今も自分が生きている事に疑問を感じるし、あの頃の事を夢に見てうなされる。恒常的な胃痛と突発的にやってくる精神障害は、もう慣れた。どうやった所で消えはしないから、結局折り合いをつけるしかないのだ。

ただ一つ、私でさえ信じられないのは、結婚した事だろう。独りで生きると決めていたのに、だ。

私は家庭を持つ事も、子供を儲ける事も怖かった。

『虐待は繰り返す』と知っていたこともあるし、私自身、自分の感情を抑えられない時があると解っていた。激昂して怒鳴り散らしたくなるし、手当たり次第に物を壊したくなる。爪が食い込むほど拳を握り、奥歯が砕けるまで噛み締めても、十回に一回は失敗した。だから、自分が憎悪し続ける男と同じように、誰かを傷つけるのが怖い。

ましてやそれが、愛する人であり、護るべき家族であったならと思えば、なお更だ。

一度つけられた傷は一生消えないと知っていればこそ、出来るだけ近づかず、心を開かず接するのが最良だった。

幸い、私は独りに慣れていた。そうなるべく生き、そうである事を望んだ。

友人知人は多かったが、彼らから憎悪されたとしても、私の心は些かも揺るがない。

何しろ私自身が見下げ、嫌っているのだから、他人にすれば尚そうだろうと思えてしまう。

そう思えるように、自分を作ってしまった。

だが、妻と出会ってその考えを棄てた。
棄てざるを得なかった。

妻は児童養護施設の出身だ。

つまり孤児なのだ。

生後間もなく棄てられ、実の両親がどこに居るのかも解らない。

ああ、解ってる。

今これを読んでいる人は、嘘だと思うことだろう。

虐待を受けた男と棄てられた女、か。ドラマにでもなりそうだし、
いっそ、ドラマだったらどれだけ救われるか。

自分のことでなければ、私だってこんな話は信じないだろう。

まあ、嘘か本当かなど、どうやった所で証明できないしな。

施設の名前だとか実名だとかを挙げれば、ある程度信憑性は出る
だろうが、それをやれば妻が傷つく。

実際、こうして書くことさえ、許可を取るのに苦労した。誰だっ
て知られたくないさ、こんな話。

それでも、と頼み込んで書いている。

そこを考えて欲しい。

話を戻すが。

妻も特殊な状況で育ったから、私と似たり寄ったりの考え方をし
ている。基本的に他人を頼らないし、滅多な事では弱音も吐かない。
それが何の役にも立たないと知っているから、無理やりでも笑おう
とする。

出会って間もない頃は、本当に笑ってばかりいた。怒ったところ

も悲しんでいるのも見た事がなかった。それに不自然さを感じたのは、多分、本能的に『同類』の臭いを嗅ぎ取ったのだろう。もしかしたら、彼女に惹かれたものと同じ理由かもしれない。

だが、私と違う点が一つあった。

彼女は『家族』を求めている。

幸せな家庭を、暖かい家を、笑い合える人々を、そうしたものを病的なまでに追っていた。

いつも夢見るように、理想の家族の話をした。その度に私は、

「ならオレと付き合っても意味ないな」

と、冗談めかして言ったが、殆ど本音だった。彼女の事は好きだったし、愛していたが、これ以上踏み込むのは危険だと一種の自己防衛本能が働いていて、私はいつでも彼女を手放せる心の用意をしていた。今更ながらに思うが、私は酷い男だな。

この頃はもうお互いの素性を知っていたし、彼女は、私が家族を欲しない事を知っていた。

それでも私と付き合っているという事は、納得してくれているのだと思っていたのだが、どうも違かったようだ。

突然、別れを告げられた。

別れる事自体に異論はなかった。自分と居れば幸せになれると自惚れられるほど傲慢ではないし、それで彼女が幸福になれるのなら、寧ろ望むところだった。私にとって大切なのは彼女が傍に居る事ではなく、どんな形であつても彼女が幸福であることだった。私の愛情とは、そういう多分に自己満足的なものだった。

だからもし、彼女が他の男を好きにでもなつて別れを告げたのなら、私は今でも独りだったろう。

彼女は泣いていた。

見たこともないくらい顔を歪めて、堪えきれなくなった涙を零しながら、繰り返して私に謝った。

何度も何度も謝りながら別れを告げた。

愕然とした。

何故彼女が謝らなければならないのか、まったく解らなかった。

兎に角、理由を訊かなければ答えようがなく、静かに宥めながら言葉を待った。

そして、告げられた理由は、私に怒りを生んだ。

——子供が産めない自分が傍に居れば、あなたの幸福の邪魔になる。今は家族が欲しくなくても、いつか必ず欲しくなる。その時、自分を選ぶ筈がないし、選んではいけない。

だから別れようと言った。

あれ程の怒りを感じたことはない。

なんと醜く、歪な優しさだろうか。

私はこの時まで彼女が子供を産めない事を知らなかったし、こんな事を考えていたのも初耳だった。一言も相談せず、自分一人で悩んでいた彼女に腹が立ったし、そう仕向けた自分にも腹が立った。何より、こんな時まで纏わりつく過去が、心底憎かった。

彼女は私と同じなのだ。

家族を持つことを否定し続け、幸福になることを否定し続け、誰かに幸福を与えられる事を否定し続けた。自己暗示をかけなければ、欲求と現実の狭間で心が崩れる。だから、それは望んではいけないのだと自分に言い聞かせ、いつの間にかそれが真実になる。そうでもしなければ、生きる事さえ叶わない。

何故、私たちはこんな思いをしなければならない。

私たちが生まれてきたのは、それほど罪深い事なのか。

私たちが生きることが、それほどまでに悪なのか。
望んで生まれてきた訳ではない。

勝手に産み落とされて、勝手に棄てられただけだ。

なのに何故、私たちは、こんな当たり前の幸福さえ望めないのだ。
理由があるなら教えて欲しい。

いったい何故だ。

後の事を言えば、その日の内に指輪を買って彼女に押し付け、その足で役所に行って婚姻届を貰い、あたふたするだけの彼女に判子を押させて提出した。

それが、私が結婚するに至った経緯だ。

嘗て虐待を受けた多くの方は、自身の経験を話したができない。
当然だろう。こんな記憶、振り返るのも忌まわしい。出来れば忘れていたいさ。

それは私も同じだ。こんな不幸自慢みたいな話、出来ればしたくない。

だけど、こうも思う。

私がこうして書き記す事で誰かの目に留まり、これから生まれるかもしれない虐待児童を一人でも減らせるのなら、と。

そして、今苦しさ耐えている人に、少しでも光が射せば、と。

私たちだって、全てが順調に行っている訳ではない。

妻は大学を学資ローンで出ているから、その返済を行なっている。
私の方は、あの十五年間に掛かった私の養育費およそ一千万を返済する為に、毎月ちまちまと一方的に金を送り続けている。

それが、私たちの命に付いた『借金』なのだ。

これを支払いきらないと、私たちの命は、私たちだけの物にはな

らない。

勝手な思い込みだが、それがケジメなのだと思っている。

それに、例えば借金を全額返済したとしても、過去が消えるわけでもない。

妻は未だに子供が産めない事を気に病み時々泣くし、私は夜中に跳ね起き、トイレに駆け込んで吐く日々だ。

時には、私たちに傷をつけた張本人を、滅多刺しにしてやりたくなる。

これまでも何度となくそう思ったし、頭の中で繰り返しシミュレーションした。包丁で顔といわず腹といわず、原形を留めなくらい切り刻んでやろうか。いや寧ろ撲殺のほうがいいかもしれない。この拳で殴りつけた方が、復讐の快感をより感じられるんじゃないだろうか。毒殺もいいかもしれない。ゆっくりと、じわじわ感覚を失っていく恐怖と苦しみで悶えた顔を、笑いながら見てやりたい。

そう思わないでもない。

だけどな、そんな事をしてもし私たちの傷は消えないし、何より自分の人生を棒に振る。

これまで、あれ程苦しんだのに、あんな屑共の為に、これから先の人生まで棄てるなど馬鹿げている。

世間というのは、そんな事情を斟酌してくれない。ただ『殺人者』とレッテルを貼られ、蔑まされながら生きなければならなくなる。

私たちは、今、家族ごっこをしている。

どちらも知識としての家族しか知らないから、お互いに考えた『良き夫』『良き妻』を演じている。

それがいつか本物になると信じて、一つ一つ積み重ねている。偶には喧嘩もするが、それでさえ、私たちにとっては幸せなことだ。

喧嘩というのは、本音が言えなければ出来ない。取り繕う必要のない相手でなければ、本気の喧嘩は出来ないのだ。私たちには、そ

んな相手は互いしか居ないし、そう思っただけで貰える事が嬉しい。

お互いの傷を癒す事は出来ないけれど、それでも、もう一人で震えなくてよいと思えば、これほど幸せなこともない。

帰りたいと思える場所が『ウチ』なのだと言うが、私にとってそれは、妻だけだ。

その場所を失わないために私に出来るのは、決して私から手を離さないこと。

そして、握り返された手を傷つけない事だ。

その為ならば、人生の全てを賭けると誓ったのだ。

それが、私が『ここに居てもよい理由』だ。

(後書き)

嘘だとも思うも自由。

本当だとも思うも自由。

私はもうこれ以上語りたくない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0208q/>

0円の命

2011年8月30日03時24分発行